

小動物における 細胞診の初歩の初歩 ～採り方・見方・考え方～

編著：酒居洋樹（岐阜大学 応用生物科学部 獣医病理学分野 准教授）

shiroki@gifu-u.ac.jp

大型本、254 頁、定価（9,500 円＋税）

出版社：チクサン出版社 2009 年発行（緑書房 2016 年 増版改訂 12,960 円＋税）

本学の卒業生が、動物病院の臨床検査技師として就職を決めたと聞いたときに、私は思い出したことがあります。それは、私が細胞検査士として働いていた 20 数年前のある日のこと。届いた検体の依頼書には、臨床診断名：乳腺腫瘍（疑）と記載があり、患者名には、***ポチ（イヌ）。そして、ギムザ染色標本が一枚だけ。ヒト以外の標本を診たのは初めてで、顕微鏡を覗いて診ましたが、正常細胞か良性腫瘍か、ましてや悪性腫瘍なのか全く判別できなかったことです。このときには、ペット（イヌ、ネコなどの小動物）の解剖・組織・病理を勉強する機会もなく、ましてや組織像や細胞像についての成書も見つけることができなかったことを思い出しました。

本書の序文にも記載がありますが、「1997 年では年間 50 例の細胞診検体が、2008 年ではなんと 30 倍の 1500 例」まさに、私がイヌの乳腺標本を診たのもこの小動物の細胞診検査が増加している時期だったのかもしれない。本書は、ペット等の小動物に対する細胞診の専門書としては初期の頃に出版された一冊ではないかと思っています。近年は飼われている小動物（ペット）の増加、ペットの高齢化によって、積極的に細胞診検査が実施され、その結果は動物病院での診療にも有効であるということを感じました。

本書は小動物の細胞像の説明だけにとどまらず、「第 1 章 細胞診とは？細胞診から何がわかるのか？」といわゆる細胞診検査の概論についての記載から始まり、「第 2 章 基礎的な採取方法」「第 3 章 深部病変に対する画像ガイド下 FNA」「第 4 章 標本作製と観察」では検体採取から標本作製について、「第 5 章 細胞の形態と観察」では、正常な細胞の説明の記載があり、「第 6 章 腫瘍性病変と非腫瘍性病変の鑑別」では炎症などの非腫瘍性での細胞の変化、腫瘍の発生と由来の違いからの細胞像の鑑別点など、第 1 章から第 6 章までは、大きな写真や図を多用したページが多く、細胞診の初心者にも配慮した、理解しやすい内容であると思います。第 7 章からは各論となり、体表、骨・筋肉および関節、リンパ節、脾臓、

消化器、肝臓、鼻腔、気管・肺、尿・膀胱、体腔貯留液（胸水、腹水および心嚢水）、乳腺、腎臓・生殖器、内分泌・脳神経などに分かれて解説がなされている。各領域別に病変についての詳細な説明と共に、肉眼組織像や HE 組織像、免疫組織化学所見なども併せた解説が詳細に記載されており、病理組織像と細胞像を対比して理解しやすい内容となっている。ただ、細胞像の写真はそのほとんどがギムザ染色による写真であり、ヒトの細胞診アトラスでは一般的なパバニコロウ染色の細胞像がほとんどないことは、動物を対象にした現場では細胞診はギムザ染色標本での診断が主流という特徴を表しているのではないかと思います。小動物の病変の中でも、扁平上皮癌、リンパ腫、白血病、メラノーマ、乳がん、腎細胞がんなど、ヒトでもよく耳にする病変もありますが、脾臓や鼻腔といった部位の細胞診検査はヒトでは経験することが少なく、小動物での特徴的な細胞診検査であると感じました。私が過去に経験したイヌの乳がん（疑）については、本書の中に、「イヌの乳腺腫瘍では、細胞診による良・悪性の判別は困難とされている。」との記載があり、また、なぜ「イヌの乳腺腫瘍では細胞診が適用しにくい」のかについてもイヌの乳腺の病理組織学的な特徴も併せて詳細な記述がありました。

このように、本書は細胞診検査の初心者から実際の臨床で採取された材料の診断方法等も理解しやすい内容となっています。イヌの細胞診検体を診た当時にこういう成書があれば、診断の一助になっただろうと思いますし、ヒト以外の検体の検査を行う可能性のある臨床検査センターでの業務、臨床検査技師の養成校を卒業して動物病院での細胞診業務に従事するような場合でも、内容を正しく理解し、活用することで、正確な細胞診検査に役に立つ一冊だと確信しました。

（中野智裕：純真学園大学 保健医療学部
検査科学科 nakano@junshin-u.ac.jp）